

昔の本山参り

江戸時代の本山参り

江戸時代の後期、越後国蒲原郡角田浜村(※)には、真宗門徒の家が126戸ありました。そのうち、弘化3年(1846)から約20年の間に、128名以上がご本山(ほんざん)に参拝したという記録が残っています。約半数は女性です。

当時、越後と京都の往復には、最短で37日もかかりました。まさに大旅行です。そうした旅をするには、文字通りの一大決心と、それ相応の費用が必要であることは言うまでもありません。それでも門徒たちは、京都をめざしたのです。

「一生に一度は、何としてもご本山へ！」

角田浜村の真宗門徒たちは、ある者は文久元年(1861)の親鸞聖人600回大遠忌(だいおんき)に参拝するために、またある者は法名をいただくために、遠路をおして、ご本山にお参りしたのでした。

※現在の新潟市西蒲区角田浜(にしがは)

明治と昭和の大遠忌

明治44年(1911)、親鸞聖人650回

大遠忌がお勤まりになりました。このたびは、江戸時代だった50年前とは様相がずいぶん変わっています。特筆すべきは交通手段の発達で、参拝の団体列車が多数仕立てられ、ご本山の近くには臨時の駅が設置されました。

昭和36年(1961)の700回大遠忌では、鉄道に加えてバスが登場します。臨時駐車場となったご本山前の堀川通りは、参拝者を乗せたバスで埋め尽くされました。

650回忌も700回忌も、100万人の参拝者があったと言われています。何もの多さだけが大事なわけではありませんが、江戸時代から連綿と受け継がれてきた、真宗門徒の親鸞聖人に対する想いを、こうした数字からうかがうことができましょう。この篤き想いを、次の世代にも伝えていきたいですね。

親鸞聖人の御前に

人から人へ

この写真を見て、と手渡されたのは、50年前の700回大遠忌、本願寺団体参拝の集合写真です。「この人達に誘われたおか

げで、親鸞さまのお念仏に合わせてもらいました。辛い時も、お念仏に支えられたことです。今年、生涯2度目の大遠忌に参らせてもらいます」と、しみじみお話しく下さいました。

また、全国各地でも、大遠忌法要が勤まっています。ある家族は、親から曾孫の4世代揃ってのお参りです。「毎朝、曾孫とお仏壇に手をあわせます。50年後、この子の家族が、800回のご遠忌に参ることでしょう」と、嬉しそうにおっしゃいました。

人から人へ、親から子や孫へと、絶え間なく受け継がれる念仏の教えの確かさを、ひしひしと感じます。大遠忌法要にあう、深い意味を受け止めたいことです。

み教えをいただいて

なぜ750年にわたり、沢山の人がびとが、大遠忌法要にお参りになったのでしょうか



臨時バス停車場(堀川通)

か。それは、老いや別れなど、人生の苦悩を乗り越える道を、念仏のみ教えに聞きひらいたからに他なりません。親鸞聖人の示された、念仏の教えを究極の拠り所とし、幾多の苦難を乗り越え、力強く人生を歩む身を喜ばれたのです。

この度、私たちも750回大遠忌法要のご勝縁を迎えました。「宗祖讃仰作法」をお勤めする声はそのまま、親鸞聖人がこの私に、み教えを説き、寄り添い、ともに歩み続けてくださると受け止められましよう。

大遠忌はゴールではなく、新たな出発点です。日々、お仏壇や、最寄りのお寺など、親鸞聖人のお導きを聞き続けるところに、確かな人生がひらかれるのです。

一日のたしなみには朝つとめにかかさじとたしなむべし

一月のたしなみにはちかきところ御開山様の御座候ふところへまゐるべしとたしなめ

一年のたしなみには御本寺へまゐるべしとたしなむべし

(『蓮如上人御一代記開書』より)



境内にあふれる参拝者(650回大遠忌)

連絡先

©監修 本願寺仏教音楽・儀礼研究所

シリーズ大遠忌Ⅲ

本山参り